

# 大学出版

The Association of  
Japanese University Presses

No.128

2021.12

秋

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

アカデミアの多様なかたち  
知的営為という船に乗る  
——独学の自由とその先に広がるもの 読書猿 1  
身体性のアカデミア 吉澤 剛 7

「遅い速度」の学びの場  
——国立人文研究所が目指すもの 越智博美 14

ゲンロンはアカデミズムを目指さない 上田洋子 20

〔新連載〕何年経っても忘れない、編集者の一冊 『3』

座 小田豊・尾崎彰宏編

『今を生きる 東日本大震災から 明日へ！ 復興と再生への提言』

1 人間として 小林直之

表2



一般社団法人  
大学出版部協会

## 何年経つても忘却されない、編集者の一冊『3』

座小田豊・尾崎彰宏 編

『今を生きる 東日本大震災から明日へ！ 復興と再生への提言』

小林直之（東北大出版会）

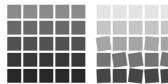
### 1 人間として

今を生きる

東日本大震災から明日へ!  
復興と再生への提言

#### 1 人間として

座小田豊  
尾崎彰宏 編



Carpe Diem

Carpe Diem -今を生きよう-  
今日の餘りを摑み取れ。

被災地において、「人間」について何を語りうるのか。

東北大出版会

『1 人間として』は、東北大出版会 大学院文学研究科所属（刊行時）の研究者 11 人による論考集。哲学・文学・宗教学・日本思想史等の分野から「人間の根底」を問い、被災地において人間として生きることを言葉に表出した。装幀：菅原明善 印刷：カガワ印刷株式会社

[東北大出版会・2012年/A5判並製 232頁・定価 2200円]

「本をつくるしかないな」と思った。  
この「つくるしかないな」は、使命感や決意をまとうものではなく、自分の無力さを自分に言い聞かせるような心模様からのものだ。

二〇一一年の東日本大震災は、個人に対し、社会とのかかわりを問う出来事でもあった。「この被災地で、あなたはいま、どんな役割を担えますか？」と問われ、明確に回答できず、かといってスコップを手にする勇気もない。遠回りでも復興につながるような無理な理屈をめぐらせて「本をつくるしかないな」と思っていたのが、あの頃の私だった。震災関連書のシリーズ企画が会議を通ったものの、本をつくる役割だけでいいのかという疑問は消えなかつた。全五巻の編集がほぼ同時に進むことになり、原稿整理に埋もれながら難問への回答を先送り、いや放棄していることにも気づいていた。

そんななか、シリーズ第一巻「人間として」に寄せられた佐倉由泰先生（国文学）の「縁」——御伽草子「ものくさ太郎」に学ぶ」の原稿を読んだ。おなじみの昔話を奥深い「縁」の物語ととらえ、皆が「縁」によって生かされ合っていると読み解く興味深い論考だった。縁は、普段は忘れやすく見過ごされやすいものだ。しかしこの物語と論考は、縁を尊び、縁が人を生かし支えることを軽やかに語り続ける。ふと、気持ちが軽くなつた。

被災地で本をつくるという今を生きているのも、生かされているのも、不思議な「縁」によるものかもしれない。ならば、無理な理屈も難問への回答も不要ではないか。この時この地で大学出版の編集者である縁を尊び、縁に支えられ、本をつくろう。そんなふうに思い、この気持ちさえ忘れなければ、この先もさまざまな本をつくつていけそうな気がした。

ものくさ太郎の話は五つの餅から始まる。餅のように白い五冊の本は、刊行後も著者・読者とのたくさんの「縁」へと導いてくれている。使命感と決意をもつて、その縁に深く感謝しなくてはならない。

# 知的營為という船に乗る——独学の自由とその先に広がるもの

読書猿（独学者）

## 学術研究を支えるもの

屋根のないところで暮らす生き物にとって、生存に直接的な影響を与える外気温や天候の変化が重大事であるように、寄る辺のない独学者は、知的營為を支える環境とその趨勢とに関心を持たざるを得ません。

例えば、大学を離れると、所属していた頃に使えた有料データベース・電子ジャーナルが使えず、別の手立てを考えなくてはならなくなります。またコロナ禍の影響で最寄りの図書館が閉館したり閲覧室に入場制限がかかれれば、文献調査に不便を感じます。

しかし今、私が関心を寄せているのは、間接的ではありますが、もつと広範で深刻な影響が懸念されるものです。ここ数年、編集者とお会いすると「とにかく大学の先生が本を書いてくれなくなつた」という話をよく耳にします。

競争的資金の獲得と増え続ける学内業務、その他様々などが重なって、「とてもじゃないが、そんな時間的余裕がないなつたのでしょうか」という言葉が続きます。

懸念は、良質な書物の供給が先細っていくことだけではありません。私たちの社会では、出版助成金と大学系出版会が学術書の供給をもっぱら担ってきたアメリカ等とは異なり、一般向け書籍を出す商業出版社がその一翼を担い、「人文書」という他国にはあまりないジャンルの書物を成立させてきました。これはアカデミアの外に分厚く存在する読者公衆（reading public）が、そうした書籍を受容し、支えてきたことを意味します。

第二次大戦が終わった頃、二〇世紀半ばになつても、日本における大学の数は、官・公・私立あわせてわずか四八校しかありませんでした。戦前、学術の世界へアクセスできる機会はとても限られていたのです。それでも、少なく

ない人たちが、講義録を取り寄せたり岩波文庫を買い求めて、知の扉を開こうとしました。「独学者」とは元々、こうした人たちに与えられた呼称でした。

読者と書物は、鶏と卵の関係のように、お互いがお互いを生み出すような円環的な因果関係を形成しています。良い書物が世に出ることが良き読者を育て、良き読者が選書し購買し読書することが、新しい良い書物が世に出る可能性を支え広げてきました。

しかしこうした好循環は、わずかなことで悪循環に転じる脆弱性を有しています。ちょうど私たちの全身に酸素と栄養を送り届ける血液が、傷口から入った毒を全身に回わしてしまうように、そして傷口が塞がらなければすべての血液が失われてしまうように、循環の一部が傷つき損なわれば、その影響は知的世界の隅々まで広がりかねません。

(1)

学術情報の流通・循環について、その望ましいあり方を、「贈与の円環 (Circle of Gifts)」と呼ぶことがあります。

(1) 研究者は既存研究を参考して、研究を計画し、また自らの研究を位置付ける。(2) 研究者が研究成果を論文等にまとめ、それを学会誌に投稿する。(3) 学会は、投稿された論文等を審査し、雑誌に編集して出版する。(4) 大学図書館を中心とする研究図書館は、論文等を収集・保存し、研究者に提供する。以下(1)に戻って繰り返し。

一九八〇年代末、アメリカの図書館員たちは、こうした円環的な学術情報流通に、破壊的な影響を及ぼす学術雑誌

の価格高騰を雑誌の危機 (Serials Crisis) と呼びました。限られた予算に対して雑誌価格が高騰すれば、図書館が購入できる雑誌購入タイトルが減少するだけでなく、図書館の資料購入費が雑誌へと回り、学術書の購入までも減少するからです。先の贈与の循環で言えば、(3)から(4)へとつながる部分に傷口が生じるようなものです。そして学術情報の流通は円環を成しているために、その一部が傷付けられるための購読料は消え去り、よつてその学協会、ひいては科学プロセス全体が弱体化する事態を引き起す<sup>①</sup>。

今、私たちの目の前で起こりつつあるものは、アカデミア内部で生じた「雑誌の危機」による贈与の円環の破壊に似た、しかしより大きな変化であるように思えます。

人々の行動を直接左右し、そのためその増減に一喜一憂する近接因は、資金や時間といったリソースの欠如や剥奪として現れます。それとは別にリソースの存在そのものに長期的な影響を与えるものがあります。端的に言えば、アカデミアの外にどれだけ学術書や研究論文を読む人が存在するかが、間接的にですが、しかし長期的にアカデミアの浮沈を左右します。学術研究に注意を払わざ意義を認めない人が増えれば、私的に示される敬意（これこそ人文書を支えていたのです）はもちろん、公的にも社会的にも学術研究に割り当てられるリソースも減じていくでしょう。だからこそ、学術出版と商業出版がはつきり分かれたアメ

リカでは、論文集やハンドブックを編集するその分野の第一人者たちが、その一方で一般書を執筆するのです。

人文書というジャンルを支えるほど の厚みを持った層が、小さなアカデミアを遠くから支えていた時代は終わりを迎えているのかもしれません。

このことは、大学が、専門知の扱い手としてトレーニングを積み、継続的に成果を出し続ける「専門家」たちが集い、それぞれ平等の権利を持つことの上に成立しているギルド型の組織であることをやめ、そこに属する研究者もまた、その独立性を揺るがされ、資金や時間というリソースを奪われ続けていることと連動しています。むしろ大きな円環をなしています。

アカデミアの外に、社会全体に広がる大きな悪循環は、独学者の知的環境もまた、確実に悪化させていくでしょう。知的営為の蓄積と公開を損ない、最終的には知のエコシステム全体の衰退につながるからです。

### 独学者の環境構築

しかし独学者は、環境に翻弄されるだけの存在ではありません。学ぶための機会や条件が整わなくとも、知ることや学ぶことを諦められない人が独学者となる（私はこれを独学者の定義だと考えています）ことからすれば、ささやかれあれ、恵まれない環境と足りないリソースに抗う工夫を重ね、身の回りの知的環境を改善することこそ、独学者の

本業であるからです。

もう一度、他の生き物を比喩に使うとすれば、自力で川をせき止める「ダム」をつくり、自らの住環境を整えるビーバーのような作業が、独学者には必要となります。

何故なら、ヒトという生き物は、体温を一定に保つ生理的能力をもっていますが、意思についてはそのかぎりではないからです。例えば学校は、飽きたりサボつたりしがちなヒトの弱点を補完し、やるべきことを与え、気が散らないように環境を整え、学ぶことから逸れようとする学習者を学びに立ち戻らせるための人工環境です。こうした用意された環境を利用できない独学者は、ビーバーよろしく、自前で「ダム」をつくらなくてはなりません。

独学者がつくる「ダム」の多くは、自分一人に影響を与えるだけの、ごくささやかなものです。例えば、その日学んだ項目と分量をノートなどにただ記録していくラーニングログという技法は、独学者に現在地とこれまでの重ねてきた努力を可視化するものです。これが何の役に立つのかといえば、怠け心や「自分は何もできていない」という自己嫌悪から立ち直る助けとなります。ささやかな記録が、独学で最も重要な学び続けることを支えるのです。

自分以外にも影響を与える技法には、読書会（会読）があります。独学者同士が集い、互いにはげまし合い、あるいは監視しあうことで、一人では途中で挫折しそうな書物を読み通せる。江戸時代にも盛んに行われた、伝統的な人

工環境の構築方法です。

拙書『独学大全』は、こうした先人たち（独学の先輩たち）の知恵と経験を、現役の独学者につなぐために書かれました。それぞれ手前勝手に行われるはずの独学にわざわざ「指南書」めいたものを用意した理由がここにあります。

状況論的転回以降の認知科学が示すように、学ぶことは知識を自分の中にインプットするというよりむしろ、自身が知識と知的営為に参加すること、そのネットワークの中に入していくことです。独学もまた例外ではありません。そのことを含めて、『独学大全』では繰り返し「独学は孤学ではない」と述べました。

独学者を「誰にも頼らない学習者」だと捉えてしまうと、独学が本来持っている様々な可能性を損ない、道に迷ってしまうと思います。独学者は、特定の教授者や環境に依存しない（できない）ことと引き替えに、古今東西すべての知的営為と知的伝統に依拠する可能性を開きます。無論、その可能性を実現するには独学者の工夫と努力が必要ですが、独学者の自由はその先に広がるものです。

拠り所がたつた一つなら、そこから生じた、意にそぐわない要求も受け入れるしかありません。逆にいろんなものに少しずつ依存しているなら、離脱しても失うものは少しあります。他にも頼るものがあるからこそ、それぞれに距離をおいて、付き合うことができます。これはフランスの社会思想家シャルル・フーリエ（彼もまた独学者でした）が

着想し、ドイツの社会学者・哲学者ゲオルグ・ジンメルが引き取った、多重帰属こそが自由をもたらすという考え方です。この発想を独学者が実装化する技法が「私淑」です。中国の孟子に遡るこの方法は、独学者に「仮想の師」という人工環境を好きだけ構築するものです。

『独学大全』の読者にも、様々な分野や集団に属する人、属さない人がいます。一人で何にも頼ることなく学びの道に飛び込んだ方たちだけでなく、学ぶことが専業の学生の方や学校で彼らに教えている教員の方、そして翻訳や執筆や創作などの作り手の方たちもいます。

独学者は「コロナ禍の巣ごもり需要」で突然現れたわけではありません。いつの世にも時代にも、おおっぴらに名乗りをあげなかつたとしても、知ることを学ぶことを諦められなかつた人は、ずっといたのです。独学者は、いろんな集団や分野に、そして複数の集団・分野にまたがつて存在していました。そしてそんな独学者を支える人たちも、決して多数派ではなかつたでしょうが、確かにあちこちにいたのです。そうした彼らが次の時代に知識をつなぎ、知の世界を広げて行きました。例えば、今は自然科学と呼ばれる知的営為がその黎明期に経験した歴史は、その好例であるように思えます。

自然についての研究は長らく、今のように大学に居場所を持てず（そこは神学のような旧来の知の場所でした）、これに携わる人たち（サイエンティストという言葉ができるのは

しばらく後です）の多くは、研究を職業にすることも、専門機関に属することもかなわず、そうしたものの「外」で、

新たに台頭してきた人たち、例えば都市の裕福な市民たちの支援を得ようとした。初期の科学書には、当時の学問語であるラテン語ではなく、彼ら市民階級の人々が読める言葉で書かれたものが散見します。例えば、ガリレイの『天文対話』や『新科学講話』はイタリア語で、ニュートンの『光学』は英語で、ラボアジェの『化学要論』はフランス語で書かれました。

その後も自然科学を教える専門機関ができるまでの長い間、自然を研究しようと志す人々は、こうした俗語で書かれた科学書を自ら読んで学び、様々に工夫を重ね、その成果をお互いを訪問したり文通で報告し合い、そして知的営為を重ねていったのです。やがて先達による連続講演や巡回講演が登場し、ここで学んだ多くのアマチュア研究者もまた新たに研究に加わりました。一九世紀最大の実験科学者であるファラデーも、その師デービーもこうした独学

者の一人でした。

こうした経緯もあって、大学に自然科学のラボが設けられ、研究と教育が固く結び付けられた後も、自然科学の発祥の地では、自身が寄つて立つ見える基盤と、これまでの経緯を忘れず、科学者は市民向けの講演など啓蒙活動を続けてきました。例えば、ファラデーがロイヤル・インスティチュートの会長となつたときに始められた有名なクリスマス・レクチャーは、会長が代わっても続けられ、現在も多くの人たちを科学と知の世界へと誘っています。

### されど船は沈まず

知の歴史の中には、独学やそれを支えた人たちが小さくとも確かな足跡を残しています。そして今も、すべての知的営為の現状と趨勢は独学者にとつても「わが事」です。

私たちは大学やアカデミアと共に大きな同じ船に乗っています。人々が知を侮り、その基盤を傷つけようとも、人が知ることを諦めない限り、この船はたゆたえども沈むこと

岩波ブックレット

## 日本学術会議の使命

池内了・隱岐さや香・木本忠昭・小沼通一・広渡清吾  
首相の会員候補者任命拒否を機に日本学術会議を法的・歴史的にどうえ直す。科学者の社会的責任？ 学問の自由？ 課題と展望？ 年表付。A5判・定価726円

## 「私物化」される国公立大学

駒込 武編

政治主導のもと学長中心のトップダウン型経営へと変貌しつつある国公立大学。七大学を舞台に、改革が生み出した混乱劇をレポートする。

A5判・定価726円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

<http://www.iwanami.co.jp/>

はない (Fluctuat nec mergitur) にしよう。

#### 註

- (1)アリソン・バックホルツ（高木和子訳）「SPARC——学術出版および学術情報資源共同に関するイニシアチブ」『情報管理』四五(五)、三三六—三四七頁(1991年)。
- (2)読書猿『独学大全——絶対に「学ぶいと」をあきらめたくない人のための55の技法』ダイヤモンド社、1991年。

# 身体性のアカデミア

吉澤 剛  
(しまねアカデミア世話人、科学技術政策研究者)

## アカデミアに託す未来

武藏国分寺公園の東側にある崖上に、チョコレートやキ

ルティングのごとき外観を施した建築物が目を惹く。そこから下り、崖線に沿って自転車で狭い路地を縫つて進むこと五分余り。鉄平石を纏い体毛のように草花を生やした私宅が、住宅地と樹林地に囲まれるようひつそりと佇む。

秋晴れの日曜日に、異形の建築物を五感で飲み込むと、何とも言えない清涼感と身に覚えのない郷愁に身を包まる。

藤森照信、というその建築家の名前は、汗顏ながらオスロで初めて耳にした。隔年で開催されている国際未来学会議で「未来のアカデミアの実践」と題した発表を終えたときのことである。一人の建築学者から、あなたたちの活動に子どもたちが出入りしている様子を見て藤森の建築的発想を思い出した、と声をかけられた。あれから彼女の真意

が何だったのかを考えあぐねていたが、藤森の著作や建築物に触れた最近、ようやくそれが少しづつ言葉として形になってきた気がしている。

コロナ禍以前からリモートワークを中心とし、今は大学を離れた身としては、大学に属し通うことの意味が以前ほど大きくなきことを実感している。ただ、学生はそういう訳にいかない。現役学生の悲痛な訴えを聞くと、大学というものは単にオンラインで教育サービスを提供する組織ではないということを如実に理解できる。大学とはむしろ、キャンパスの広場で、ゼミ室で、サークル棟で、学食で過ごした他愛もない時間のためにあるのだと思えてくる。

しかし、百出する大学改革の議論にあって、大学という場所や空間の大切さについての眼差しは鋭くない。それは大学と地域の関係を見ても同様である。地域に密着する大学や病院などの公共機関は米国でアンカー機関と呼ばれて

いるが、日本では錨の下ろし方がいささか淡白にすぎる。

地域住民にとつての大学とは、学生の居住や公開講座を通じた限定的な関わりでしかなく、潜在力のほとんどが埋もれたままだ。これから求められるべきは「大学が〈社会〉のなかに染み出し、社会課題の現場のなかで学問知の批判力や想像力を試し続けることである」<sup>〔1〕</sup>。確かにそうかもしれない。だが根柢的に、私たちは大学に変化を望んでいない。それが、大学ではなくアカデミアに未来を託す理由である。

### アカデメイアの系譜

いつたいアカデミアとは何なのだろうか。辞書的には、大学・研究所など教育や研究を行う機関や世界、またそこに関わる人々を指す。英語表記であるアカデミーも同義であるはずが、学問や芸術、技術などにおける特殊な訓練をする学校のような指導的団体という、より具体的な意味を与えられていることが多い。ゆえにアカデミアという言葉を使うのは、今や、大学や学協会よりも大上段から気取つて学問を語るときや、民間教育団体が使い古された「アカデミー」より洒脱な名前を選ぶときでしかないよう見えれる。筆者らが世話を務める運動体に「しまねアカデミア」という名称を決めたときも、それほどの理由しかなかったように思う。だが、アカデミアの源流を辿ると、これは必然とも言える選択だったのかもしれない。

アカデミアの語源はギリシア語のアカデメイアにある。

アテナイ市の北西郊外にあるアカデメイアは、もともと公共体育場をもつ公園であった。その後、スズカケやニレ、オリーブといった樹木とともに社殿、祭壇、立像などが整えられた神苑となり、この地に私邸を構えたプラトンによってこれら施設をすべて取り込む形で学園が創設された。体育场や私邸には、エクセドラと呼ばれる談論・休憩の場のほか、研究生や学生が利用できる図書室が置かれていたと考えられている。

学園に年齢制限や修業年限はなく、女性や苦学生、農民、アテナイ市外の外国人も受け入れていた。大切な行事である質素な共同食事（シュンポンシオン）などの機会を通じ、研究生や学生が友人たちと称されるような、緩やかな体制によつて開かれた関係性を実現していた。

アカデメイアでは予備科目として幾何学を中心とする数理諸学が教授・研究されていたが、その目的はあくまでも哲学的訓練に基づく眞の立法家・統治者の養成というプロトントンの実践的動機によるものである。彼の教授法は講義するというよりも、研究を組織し、研究者の方法論に対して助言や批評を与える。彼は体系的な講義を意味のある教育法とは考えておらず、教える者と学ぶ者が生活を共にし、長い時間をかけて論議を重ねることを大事にした。そこでは師プラトンの思想といえども賛否を交えて遠慮なく論評され、学問研究の自由が認められていたのである。<sup>〔2〕</sup>

日本でも近代に制度化された大学への対抗文化として、アカデミアの本質を探る議論と実践が波状的に発生してきた。大正デモクラシーにおいては、吉野作造の大学普及会、名古屋市民大学、自由大学、平民大学といった大学拡張運動が広がりを見せる<sup>(3)</sup>。終戦直後も、庶民大学三島教室や京都人文学園など、市民が主体になって大学と学問を再創造しようとする文化運動が盛んに展開され、一九六〇年代には農業の自立的発展を目指した農民の自己教育運動が信濃生産大学をはじめ、各地で組織化された。

こうした日本における地域の民主的な学問運動にあって、アカデメイアの理念を明示的に受け継いだ例がある。鎌倉アカデミアは、鎌倉大学校として戦後もなく鎌倉の地で生まれたが、新制大学の要件を満たしていなかつたことから大学の名を捨て、産業・文学・演劇の三科を独自に開設する。アカデメイアの教育プログラムや運営方法から学び取り、学生たちが「分室」と呼んだ教授たちの自宅で茶菓や食事を共にしながら討論を積み重ねた。廃校まで四年半

### しまねアカデミアの実践

生産大学をはじめ、各地で組織化された。

という短い間ながら、集まつた若者たちは八〇〇名を数え、作家や脚本家、演出家、俳優、作曲家、大学教授といった有為の人材を数多く送り出し、戦後文化史に燐然と輝く業績を残している。校長を務めた哲学者・技術史家の三枝博音が目指した「楽しい学園」とは、耳目に触れるものすべてが教養となり、本を読むことは飯を食うようにして、いつかしら知識が得られているようになっているものである<sup>(4)</sup>。

## 新刊案内

閻  
美芳 著

### 日本と中国の村落秩序の研究

A5判・218頁・9020円

木村健一著

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20

電話03-5684-0751

### 祭礼における権威創造の民俗誌

市東真一著  
——旦那衆・町鳶・若連——

A5判・322頁・9680円

吉原直樹・橋本和季・今野裕昭 編著

### グローバル化時代の海外日本人社会

A5判・310頁・85800円

御茶の水書房

設で学生たちが発表するからよかつたら来てくれないかと  
いう。ちょうど予定が合ったこともあり、完成したばかり  
の神山町の魅力を伝えるCMを視聴した。その場には地元  
住民も多く集まり、投票に加わっている。自然豊かな地域  
で、創造的な仕事。これが原風景となり、里山資本主義に  
影響を受けた「里山大学」という構想が胚胎する。

だが、似たような名前の団体が既に存在していたことに  
加え、制度的に脆弱で規模も資源も匹敵しえない活動に「大  
学」の名は重すぎた。もとより、大学とは似て非なる実践  
を目指しているのに、既存大学への牽制と目され、痛くも  
ない腹を探られることはないと悟ったのである。ただし既  
成の大学を補完する主体として、アカデミアという名前は  
悪くない。

神山町から三ヶ月後、島根大学の地域教育魅力化セミナ  
ーでアイデアを披露したのを皮切りに、研究者をはじめデ  
ザイナーや公的支援機関、市民社会組織など島根の多様な  
関係者と接触して連携可能性を探りつつ、しまねアカデミ  
アの理念を固めていった。それは、市民活動が活発な島根  
という地域に根ざし、その場所にいる人や自然と関わりな  
がら研究・教育・社会貢献を一体的に進めるというもので  
ある。

活動のメインとなる研究集会は、①地域の課題から新し  
い研究のアイデアを生み出し、地域の人たちとの関係性を  
構築するためのワークショップ、②子どもたちを含めた地

域住民参加のアウトリーチイベントと交流会、③対話型エ  
クスカーションの三つの柱からなる。このため、アカデメ  
イアや日本の市民大学と比べると、教育よりも研究や社会  
貢献の比重が大きくなっている。

これだけ聞くと陳腐な話かもしれない。実は、しまねア  
カデミアの開催にあたって最も留意し、結果として最も新  
奇性が高かった試みは、自分たちの家族をどう巻き込むか  
という点であった。

コロナ禍の現在から振り返ってみれば、研究者が頻繁に  
出張する意義は何だったのだろうと思うことばかりである。  
本当に現地まで足を伸ばさなければならないことなど、ほ  
とんどない。研究者というものは仕事が人生の一部である  
から、仕事を共にせず人生を伴にする家族には十分な配慮  
があつてしかるべきだろう。いや、もつと単純に、せっか  
く遠路はるばる自然豊かな土地に赴くのであれば、家族も  
一緒に楽しまなければもつたいない。そして、家族を連れ  
てくるれつきとした理由があれば、お忍びでコソコソする  
必要もない。逆にこれは、逃げられないという覚悟が求め  
られる。仕事もプライベートも晒すとなれば、その地域で  
出逢つたものの一切は、ただいつときの研究題材ではなく、  
自分のライフコースと全人格を賭けて向き合わなければな  
らない対象となる。

しまねアカデミアでは、研究集会の傍らで、参加者の家  
族はスマホ顕微鏡で自然観察をしたり、サイエンスカフェ

やナイトミュージアムを楽しんだり、地元関係者の協力で観光や里山遊び、オオサンショウウオの生態観察をしたり。さらに参加者とその家族が全員で古民家を改装したコミュニティスペースの草刈りや大掃除を手伝い、仁多米のおにぎりなどを楽しむ交流会に加わったり。思えば、現在も継続している比較神話学の研究プロジェクトは、研究者と地元有志との宴席で盛り上がった雑談から生まれたものだ。地域にとって、研究者はどこまでいってもよそ者でしかない。ただし、地域と関わり続ける関係人口として、地域を活性化する主体を作り出し、創発的な課題への取り組みを促すことは可能である。それが研究者の最大限の誠意であり、知識による社会貢献である。

## 大学やジャーナルの外へ

松崎有理のSF小説では、研究という仕事がAIに代替され、大学では「論文か死か」を地で行くディストピアが描かれる。アカデミアにおける人間はもはやその知性ではなく、被験者として研究材料を提供する肉体や、論文を代書する労力、科学者然として振る舞う演技にしか、その存在理由を求められない。実際、これは遠い将来の話ではなく、すでに現前している未来でもある。

シチズンサイエンスと呼ばれる最近の市民科学では、市民はともすれば、職業科学者から求められるままに労働やデータ、資金、ネットワークを提供するだけの役割にとど

まりがちである。かたや「トップ」ジャーナルへの論文掲載を至上とする業績評価に翻弄される現代の科学者も、大学やジャーナル出版社における評価システムに対する表層的で同調的な態度と振る舞いによって、アカデミック・パフォーマーとしてのアイデンティティが形成されている。<sup>(8)</sup>

さりながら、こうした学術的パフォーマンスのベクトルはどこまでも内向きである。科学者にとって、社会に対するパフォーマンスはむしろ軽蔑的ですらある。「セーガン効果」という言葉があるように、人気のある目立った科學者はそうでない科学者よりも劣っているという偏見は根強い。だが、カール・セーガンの学術的業績は、他の科学アカデミー会員と比べても遜色ない。最近の調査でも、社会的な活動を行っている科学者のほうが平均的な科学者より優れた学術的業績を残しているという。

セーガン効果を払拭するには、もつとアカデミアが開かれ、同僚と市民の両方に訴求するパフォーマンスを磨かなければならぬ。それにはつまり、研究者としての人格と、生活者としての人格を統一したアイデンティティを確立する必要がある。学界と社会のそれぞれで人格を演じ分け続けることは、結局どちら側のアクターからも信頼されえない。

プラトンが戯曲を書き、鎌倉アカデミアの学生たちが演劇に没頭したのは偶然ではない。演じることは、それを通して人や社会を知ることであり、舞台を介して観客と知識

交流を果たすことである。研究者の舞台は大学やジャーナルにとどまつてはならない。広い社会に飛び出し、さまざまな人や事物と関わり合つて、より大きなパフォーマンスを行ふことが期待される。

## 未来へのパフォーマンス

話は冒頭に戻る。藤森照信の建築思想からは、子どもたちへの眼差しを感じ取ることは難しい。だが、彼は小さな村のなかで、大人の目が届く範囲で自由に育てられたという原体験をもつ。神隠しや神事を経験することで自然信仰が根ざし、家の建て替えを家族や村人が総出で手伝つたところから、建築家へのルーツがあつたと述べてもいる。<sup>(1)</sup> また彼は、赤瀬川原平や南伸坊らとともに路上觀察学会という野散の学会を立ち上げた。偉くなりすぎた学問を街なかに引きずり下ろし、面白いものにしていこうという戯画的な声明である<sup>(2)</sup>。

本稿で見てきたアカデミアとは、学問が芸術と一体的になつて自然環境と関わり合い、社会や未来に向けてパフォーマンスをすることである。そのため教える者と学ぶ者が分け隔てなく、共同食事などで公私を超えて全人格を賭けて活動することで「楽しい」と感じられるものである。藤森の自然素材を表現として用いる建築や路上觀察学会のような卑近さは、それ自体が社会や未来に向けて開かれており、人間と自然、教えることと学ぶこと、大人と子ども、

そして知識と社会との間のフラットな関係性の実現につながつてゐる。

過去に創出された知識と制度、社会的認知に縛られてゐるアカデミアを解放し、知識の継承と累進、革新を果たしながら脆弱な未来に対する可能性を切り拓くのは、将来世代である。知識は役に立たなくても構わない。身の回りにある面白さを見つけることは子どもの特技であるし、その役を与える大人も一緒に楽しめるのがアカデミアのあるべき姿ではないか。オスロでの建築学者の一言は、たぶん、そういう意味だったのだと思うことにしている。

### 註

(1) 吉見俊哉『大学は何処へ——未来への設計』岩波書店、二〇〇二年、一四六頁。

(2) 廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』講談社、一九九九年。

(3) 田中征男『大学拡張運動の歴史的研究——明治・大正期の「開かれた大学」の思想と実践』野間教育研究所紀要第三十集、一九七八年。

(4) 前川清治『三枝博音と鎌倉アカデミア——学問と教育の理想を求めて』中央公論社、一九九六年。

(5) 藩谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店、二〇一三年。

(6) 吉澤剛・岩瀬峰代・田原敬一郎「しまねアカデミアという挑戦——学術界の革新に向けて」『研究・イノベーション学会第三二回年次大会講演要旨集』二〇一七年、七五〇—七五四頁。吉澤

剛『不定性からみた科学——開かれた研究・組織・社会のため  
に』名古屋大学出版会、110111年、一八五—一八七頁。

(7)田中輝美『関係人口の社会学——人口減少時代の地域再生』大  
阪大学出版会、110111年。

(∞)Yves Gendron (2008) Constituting the academic performer: the spectre of  
superficiality and stagnation in academia. *European Accounting  
Review* 17(1), 97-127.

(∞)Susana Martínez-Conde (2016) Has contemporary academia outgrown  
the Carl Sagan Effect? *Journal of Neuroscience* 36(7), 2077-2082.

(10)藤森照信『建築が人にはたらかわせ』平凡社、110110年。  
(11)赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊編『路上觀察學入門』筑摩書房、  
一九九三年。



激動する「都」の600年!  
京都の中世史  
全7巻 刊行中!

[企画編集委員]

元木泰雄(代表)・尾下成敏・野口実・  
早島大祐・美川圭・山田邦和・山田徹  
各2970円 〔内容案内〕呈

## 南北朝内乱と京都

山田 徹著 都へ駆けつける武士、右往左往する公家廷臣…。謎  
多き激動期の都に迫る。(第1回)

## 戦国乱世の都

尾下成敏・馬部隆弘・谷 徹也著  
畿内の戦乱と洛中洛外、都鄙の文化  
交流、豊臣・徳川の首都…。乱  
世に翻弄された都の姿!(第2回)

推薦します ※敬称略、50音順  
上横手雅敏(京都大学名誉教授)  
澤田瞳子(歴史小説家)

戦時期日本と戦後国際政治を考える  
重要史料。待望の新装復刊!

## 巣鴨日記 正統

(合本新装版) 7150円  
昭和21年4月29日～25年11月21日  
重光 奠著 東京裁判の所感、A  
級戦犯の人物評、巣鴨プリズンの  
生活…。獄中で記した貴重な記録。

## 『一遍聖絵』の 世界 オールカラー

五味文彦著 鎌倉時代の世相を  
伝える重要絵巻。絵と詞書で一遍  
の足取りを辿り、絵巻の全体像と  
魅力に迫る。(2刷) 2200円

## 森戸辰男

小池聖一著 戦前の思想弾圧「森  
戸事件」で知られる学者・政治家。  
一貫して社会科学者であり続け  
た生涯。(人物叢書310) 2640円

## 日記と歴史百科が一冊で便利! 歴史手帳 2022年版 1320円

## 吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8  
電話03-3813-9151/価格は税込  
2021-2022年版「出版図書目録」呈

## 「遅い速度」の学びの場——国立人文研究所が目指すもの

越智博美（国立人文研究所副代表理事、専修大学国際コミュニケーション学部教授）

### 大学外大学構想——国立大学改革の流れのなかで

二〇一五年、夏。中央線のとある駅前の喫茶店で、わたしたちは頭をつき合させていた。わたしたち、とは、当時一橋大学の同僚だった大河内泰樹さん、河野真太郎さん、そしてバタイユ研究で博士号を取つたばかりの佐々木雄大さん、それから編集者的小林えみさんと大学院生（当時）黒木あやさん。

その年の六月八日付けで当時の文部科学大臣、下村博文名義で発出された通知「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」は、人文系学問のお取り潰しとも取れる点で大きな騒ぎとなっていた。「特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、一八歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学等としての役割を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の

廃止や、社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする」（傍点筆者）という部分が新聞にも大きく取り上げられ、その後に文部科学大臣が国旗掲揚・国家斉唱を国立大学の入学式および卒業式において要請したこともあり、「大学自治の侵害」が危惧される事態になる。その後の日本学術会議、経団連等の意見表明もあいまって、最終的に九月一日、下村文部科学大臣が記者会見を開き、その「廃止」は特定の教員養成系の学部を対象としているものだと説明されたことで、議論は收まつたかのようであった。<sup>〔1〕</sup>

いつたんは収束したかに見えた文系お取り潰し騒動は、実は一連の新自由主義的な大学改革の歴史的文脈の一端にすぎない。遡ること一九九一年の大学設置基準の大綱化によって、いわゆる教養教育と専門教育等の区分が各大学に任された。その後、二〇一二年六月の文部科学省による「大

学改革実行プラン」、二〇一三年の一連の動き、すなわち、

うして始まつた。

教育再生実行会議第三次提言「これからの大...等の在り方について」（五月）、閣議決定「日本再興戦略」、「第二

期教育振興基本計画」（六月）、文部科学省「国立大学改革プラン」（二月）等によつて、道筋がつけられた。二〇一五年度施行の改正学校教育法ならびに国立大学法人法は、

教授会の意志決定の役割を縮減したうえで学長のがバナンスを強化しようとするもので、それが運営交付金の配分にも影響する。つまり一連の改革に自ら乗ることが要請されているのである。この過程でさらに明瞭になつたのは、競争原理や受益者負担、ステークホルダー、あるいはP D C Aサイクルといった新自由主義的な経営の用語が大學という教育の場を語る際に多用されるとともに、授業料値上げによる大学の「自己収入拡大」も組み込まれ、今や国立大学が、公共の機関ではもはやなく、国に強力にコントロールされながら新自由主義の経済市場の競争に参入することを余儀なくされる存在になつたということだ。

この文脈において、即座には役に立たないとされる人文系学問の立場は脆弱だ。学問の流れを踏まえながら学び、思考する訓練には時間がかかるが、そうした時間そのものが大学という学問の場ですら確保しづらくなつていて。先に言及した学校教育法、国立大学法人法の改正への反対運動を実践していた大河内さんが考えついたのが「大学を大学の外に出すこと」だつた。「頭をつき合わせる」日々はこ

### 三角屋根のロゴとともに——KUNILABO立ちあげ

小さからうと人文學の学びの場をつくりたい。文教都市でもある国立で展開できなか（KUNILABOのロゴは、旧国立駅舎を思わせる三角屋根の建物をあしらつてゐる）。学びたい市民がいて、市民に愛される書店も健在だ。KUNILABOを創るプロセスは、こうして立ち上がつた。

市場原理に飲み込まれつつある大学の外に大学の知を拡げたい。研究者のコミュニティを市民に開き、ともに学び合う場をつくり、時間のかかる知の営みも可能にしたい。先行している団体、例えば京都アカデメイアやゲンロンカフェはどんな活動をしているのか調べよう。まだ専任職を得ていらない若手の研究者にもその場を開いて収入の足しにしてもらひながら経験やスキルを得てほしいし、もとよりその人たちの研究を知つてほしい。キックオフにそんな人文學のことを語ってくれる人に講演をしてもらえるといいね。そんな議論を重ね、さまざま...人の手助けやお知恵を借り、S NSのアカウント開設、パンフレットの駅前配布、国立市の掲示版にチラシを掲示といった広報を経て、二〇一六年の春、N P O法人国立人文研究所、そして人文學の学校KUNILABOは動きだした。経営のしろうとしかいない集団に、長く続けられるように基本を伝授し、助走とともに、出発を見届けてくださつた編集者の小林さんにはあら

ためて感謝したい。

少々長くなるが、現在ウェブページに掲げられている紹介文の最初の段落を引用する。この理念は今に至るまで共有されているものだ。

国立人文研究所（くにたちじんぶんけんきゅうじょ、通称くに研）は、大学教員と大学院生を中心とした人文学者の専門家の知識を、哲学や文学、歴史学などを勉強したいと考えている市民とつなぎ、アカデミズムと市井の垣根を越えた知のコミュニティを形成することを目指して発足しました。名前の由来は、発足した場所（国立市）です。

経済のグローバル化が進む中で、直接職業に結びつく教育が重んじられる傾向がありますが、職業生活においても家庭生活においても人間と人間の関係が基本である以上、人文学をつうじて人間にについて深く学ぶことは依然としてとても重要であると考えています。メインプロジェクトである人文学の学校「KUNILABO（くにらぼ）」は、そのようなニーズに応えることのできるものでありたいと思っています。

「ゼミ」は月二回で四か月。高橋源一郎さんにキックオフの講演会をお願いしたこと、周年記念の講演会も習わしになつた。第二回は翻訳家の金原瑞人さん、第三回は日本史研究者の吉田裕さん、第四回は哲学者の鶴飼哲さんにお願いした。その他に、KUNILABO創立以前から大河内さんが運営していた、一〇名前後で語りあうじんぶんカフェも、KUNILABOの運営となつた。この間、若手研究者による刺激的な講義、例えば最初の二年間だけでも佐々木雄大さん「エコノミーとは何か——概念から学ぶ哲学史」、戸谷洋史さん「原子力をめぐる哲学」、松本礼子さん「革命前夜のパリ——「世論」誕生からみる権力イメージの変化」など、それぞれの分野の前線を切り開く若手の話を聞くことができた。すべての企画においてジェンダーバランスに心がけることができるのも、小さな会議体で検討しているからかもしれない。

KUNILABOの活動をざつと紹介すると、四月期と九月期という二期制で動いている。おもに歴史、哲学、文学、芸術関連の講座からなる通常の「講座」は月一回で四か月。

なかでも、時間がかかる学びを実践し続けているのが、ヘーゲル講座とラテン語講座だろう。開校時から続く大河内さんによるヘーゲルの「精神現象学」ゼミは、毎回数ページほどを読み進めながら、今に至るまで続いている。また村上寛さんによるラテン語講座は、二〇一七年四月期に「ラテン語に触れてみる」という入門編の講座から始めて、ゼミ形式にあらためたうえで初級、中級と進み、現在は「ラテン語を読んでみるV」として、ネポスの『英雄伝』読解に取り組んでいる。ヘーゲルもラテン語も、学ぶ苦しさと

# 知泉書館

## 疫病・終末・再生

中近世キリスト教世界に学ぶ  
甚野尚志編 疫病が地域や社会、時代に与えた影響という証明的解説 菊/364p/6000円

## 歐陽脩

### 11世紀のユマニスト

[知泉学術叢書17]

劉子健／小林義廣訳 米国で活躍した著者による定評の英語版概説。歐陽脩の全体像に迫る 新書/376p/4500円

## トマス・アクィナスの

### 自己認識論

[知泉学術叢書18]

ピュタラ／保井亮人訳 トマス思想の独創性を考察し、直観や主觀性の中世的起源を検討する 新書/616p/6500円

## 『ガラテア書』註解

[知泉学術叢書16]

トマス・アクィナス／磯部昭子訳 キリストの福音を伝えるパウロの思いが甦るトマスの註解 新書/384p/4500円

## 神と場所

初期キリスト教における包括者概念 津田謙治 初期教父思想の神的場所概念について多様で複雑な議論を詳細に分析した貴重な研究 菊/272p/4200円

「原罪論」の形成と展開 キリスト教思想における人間観 上智大学中世思想研究所編 原罪理解に基づく人間観の今 日的意義を最新研究から改めて問じる A5/352p/5000円

東京都文京区本郷1-13-2(税別)  
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166  
<http://chisen.co.jp>

ともに、その中で味わえる知ることや読むことの喜びがあるからこそ、ここまで続いているのだろう。 なにしろ財力がないNPOなので、固定した事務局も教室もない。当初は国立で講座のときだけシェア・スペースを借りていた。二年目から渋谷を加えて、二か所で運営した。小さな部屋を講義時間だけ借りるので、毎回の講座は、その担当事務ボランティアの人と講師が教室を整えるところから始まる。小さな場ゆえ、受講生が手伝ってくれることも多く、そこで会話が始まる。講義においても講師との距離がとても近いので、質問もしやすい。学期末の「修了式」では、受講生に修了証が大河内代表から手渡された。また参加者の中からボランティアに手を挙げてくれる人も増え、少しずつ、コミュニケーション的なものができるといったよう思う。国立にある増田書店には、KUNILABOの本棚もつくっていただいた。また、当初は若手には些少なりとも講師料をお支払いしようと、専任職を持つた人は、KUNILABOの趣旨をお伝えしながら無償でお願いす

るしかなかつたが、運営も徐々に安定し、些少ではあるが、専任職のある講師にも講師料を、また事務ボランティアの方にも謝礼を出せるようになつた。長く続けるならお手伝いいただく方には些少ではあれ有償で、という部分も少しずつ実現しつつある。

## コロナ禍のKUNILABO——無料オンライン企画、出版助成

だが、国立につくられつあつた人の輪は、コロナ禍によつてあつさりとその物理的な場を失つてしまつた。現在KUNILABOはオンラインである。だが、オンラインには登壇者も、視聴者も、遠くからでも参加できるという利点がある。多くの方の受講にもつながり、そのおかげで社会貢献の企画を走らせることが可能になつた。一つはオンラインのシンポジウムや講演会(無料)、もう一つは出版助成である。

ことに、二〇二〇年、日本学術会議「生命問題」が起り、また、複数の国立大学で学長選考をめぐる問題が同時多発

的に生じたことを受けて、「大学はどこへ向かうのか」というシンポジウムを緊急開催した。それはその後も何かあるたびに開かれ、第二弾「それで、共通テストはどうなった?」、スピノフ企画でもある第三弾「今ここにある危機と大学教育のゆくえについて」、第四弾「稼げる大学」へ向かうのか?」とシリーズ化され、多くの人たちと問題

を共有するプラットフォームを提供できた。(KUNILABO立ちあげの契機となつた問題がさらに進行しつつあるのだから、シリーズになつてしまふのは大問題なのだが)。今年度はブックトークとして、訳者や著者にお話しいただく場も設けている。フェミニズム、男性性の問題、地球環境、ケアなどの今日的な問題に加えアドルノをはじめとする哲学関連の本が取り上げられている。日本社会の大きな問題としてジエンダー平等の立ち後れがあることを思えば、こうした企画では少しばかりそれらに関するものが多くなつてもいいじゃないか、との思いもある。第二の企画、出版助成は、若手研究者の博士論文を最初の単著として出そうというもので、勤草書房の協力を得て実現できた。多くの優秀な論文が寄せられ、現在厳正な審査の過程にある。

失われた小さなスペースを、あるいはそこで醸成されたコミュニケーションの感覚をどのように取り戻すのか、それは今後の課題だが、オンラインでの講座開催もまたおそらく今後続いていくだろう。良くも悪くも、わたしたちは小さな集まりなので、これまでと同じく、話し合いを積み重ねながら、細く長く、この時間がかかる人文学を続けていければと願っている。

### KUNILABO の時間——今・ここの大外側に想いを馳せるために

二〇一六年、京都アカデメイアからKUNILABOをめぐるインタビューを受けた大河内さんは、人文学の営みを説明するのにヘーゲルの「人生の日曜日」という言葉を引いた。かつて教会に行く日曜日が、神の真理のための日であったよううに、教会に行かずとも日曜日は生活ための営行為ではなく、真理のための日。大学の時間とはまさしく人生の日曜日にあたるものなのだ、<sup>(3)</sup>と。

かつてある同僚から人文學は役に立たないと言われたことを思い出す。その人によれば、新自由主義の市場優先社会で生きることはジェットコースターに乗るようなものである。学生に教えるべきは、いかに振り落とされずに長く乗るかというスキルであり、それこそが世の中を勝ち抜くために役立つ学問なのだ、と。確かにそれは多くの人の市場での営為を助けるだろう。しかし、自分だけが落ちないということは、落ちる人がいるということだ。乗れない人もいるだろう。また、そもそもジェットコースターという乗り物そのものについてはどうなのだろう。もしもそれが壊れたら? このような、しくみそれ 자체をめぐる問い合わせ「いかに乗りこなすか」に比べれば、即座には利益に繋がらないように見えるだろう。しかし、大学における研究と

学びは、自分の利害のためにのみ、あるいは大学の知で稼ぎたい経営者のためにのみあるのではないはずだ。それだけでは、教育の真のステークホルダー——狭く言えば国民全体、もっと広く言うなら社会や人類の——ための利益は顧みられないことになってしまふ。

今ある状況それ自体を相対化するまなざしを得るのは、難しい。これがどういうことかを考えるには、最近盛んに読まれているデヴィッド・フォスター・ウォレスの『これは水です<sup>(6)</sup>』を思い出してもらいましょう。魚の生を支える水が、あたりまえにそこに存在するがゆえに魚にとって見ることも語ることも困難なように、真にわたしたちを支えているものは見えづらい。しかしジェットコースターを、あるいは水を所与のものとする考え方から離れて、それらを問い合わせ直そうとするとき、わたしたちの視界にはそれまで見えていなかつたものがはいつてくる。ジェットコースターから振り落とされた。あるいはその座席にたどり着けなかつた人の存在、さらにはジェットコースターというシステムそれ自体の問題にも想像が及ぶかもしれない。ウォレスの言うように、眼に見えないようになされているあまたの人やものに気がつき思いを馳せること、つまり日々の競争に加わらぬ時間を取ることは、自由をも意味する。あるいはそのような態度こそが、「速さと雇用と市場の成功を至上の価値」とする社会にあって、「人文学の遅い速度」で「訓練」することによって持ちうる「頭脳と心」である。

この人文学の「遅い速度」、あるいは「人生の日曜日」こそ、「これは水です」と言う知のための場なのである。

KUNILABOとは、そのような場を創出し支えることを目指す人の集まりであつたし、きっとそのような人が今後もこれを支えていくことだろう。

#### 註

(1) 大学改革の経緯については、『大学出版』第一〇六号(二〇一六年四月)の特集「文系廃止?——文科相通知騒動と国立大学改革のその後』を参照。

(2) 大学評価・学位授与機構の英文資料ではそれにあたる単語がいわゆる規制緩和を意味する deregulation であるという指摘は、河野真太郎「文化の成長と育成——首都圏国立大学の状況から」「大学出版」第一〇六号を参照。

(3) 大河内泰樹「大学の社会的役割を破壊する学校教育法・国立大学法人法改正」『世界』八五九号(二〇一四年) 参照。

(4) <https://www.kuniken.org/about>

(5) <https://kyoto-academia.sakura.ne.jp/blog/?p=6462>

(6) デヴィッド・フォスター・ウォレスの『これは水です』 阿部重夫訳、田畠書店、二〇一八年。  
(7) ガヤトリ・C・スピヴァーク『いくつもの声——ガヤトリ・C・スピヴァーク日本講演集』星野俊也編、みすず書房、二〇一四年。

# ゲンロンはアカデミズムを目指さない

上田洋子（ロシア文学・演劇研究者、ゲンロン代表取締役）

## ロシア研究者、ゲンロン代表になる

わたしは現在、株式会社ゲンロンの代表を務めている。ゲンロンは二〇一〇年に批評家・思想家の東浩紀が創業した出版社だ。二〇一三年からは出版事業に加えて、イベンツスペース「ゲンロンカフェ」を運営し、トークイベントの企画と動画配信を行なってきた。また、二〇二〇年には有料配信プラットフォーム「シラス」(<https://shirasu.io/>)を立ち上げ、著述家や研究者、アーティストらが配信し、コメントを介して視聴者と交流する場を広げている。ゲンロンカフェのトークイベントは長いのが特徴で、四時間くらいは平常運転、ときには朝まで続くこともある。

わたしがゲンロンの活動を知ったのは二〇一二年の年末のことである。翌二〇一三年七月に刊行された『チエルノブイリ・ダークツーリズムガイド』では、コーディネート

と通訳・翻訳を担当した。二〇一三年はさらにチエルノブイリへのツアーを企画するなど、プロジェクト単位でゲンロンの仕事にかかるようになる。そして秋ごろからは通常業務を手伝いはじめ、二〇一四年にはついに社員になった。東と同年代のスタッフが他にいなかつたこともあり、どんどん責任のある仕事が増えて、挙げ句の果てになんど代表を東から引き継いだ。二〇一八年の年末のことである。もともとわたしは研究者だった。専門はロシア文学・演劇で、早稲田大学で文学の博士号を取得している。まさか自分が会社の代表になるとは、これまで思ってもみたことがなかつた。月並みな表現だが、運命とは不思議なものである。なお、研究の道は捨てたわけではなく、細々とではあるが、いまも続いている。

ゲンロンに来る前の二〇〇八年四月から震災のあつた二〇一一年三月までは、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

で西洋演劇担当の研究助手を務めていた。その後、大学での常勤のポストはすぐには見つからず、非常勤講師のほか、通訳や翻訳、さらに旅行会社のアルバイトなどもしながら就職を探していた。ロシア文学・文化関連の公募はかなり少なく、わたしも就職ができないポスドクのひとりだったのだ。

とはいっても、わたしは大学院生の頃も定期的に通訳として働いており、ひたすら研究に専念していたわけではなかった。だから正直、大学の公募にはさほど大きな期待は抱いていなかつた。数年間チャレンジしてみて、無理ならばあきらめて在野に留まろう。別の仕事をしながらでも研究ができるはずだ。わたしにとって、ロシア語で仕事をし、研究を続けることは選択肢として必須だったが、大学に残ることはそうではなかつた。

ゲンロンを知るきっかけをくれたのはロシア語だった。

二〇一二年、東京の映画配給会社の依頼で、アレクサンドル・ソクーロフ監督によるドキュメンタリー映画『ソルジエニーツィンとの対話』（一九九八年）の字幕監修を担当した。その後、この映画の東のトークつき上映会が企画され、わたしにも聞き手として声がかかつた。

作家ソルジエニーツィンはソ連時代、祖国を裏切った反体制知識人として亡命を余儀なくされる。ソ連崩壊後の一九九四年、彼は国民に迎えられながらロシアに帰還した（歓迎の様子にはある程度彼自身の演出が入っているらしいが）。

帰国後は、ロシアという國のあり方をテーマに執筆し、愛国作家になつていく。ソクーロフのドキュメンタリーでは、九〇年代にモスクワ郊外の森に蟄居する作家とその妻に監督がインタビューし、作家のロシアおよびロシア語への思いを聞き出している。

東は批評家としてのデビュー作「ソルジエニーツィン試論——確率の手触り」でこの作家を論じている。『収容所群島』をはじめとするソルジエニーツィンの収容所文学を、ドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』における「大審問官」の議論と対比しながら、宗教と政治から人間の生を考える優れた論考である。わたしは当時、東の存在はもちらん知っていたが（わたしの世代からすると、東はスターである）、恥ずかしながらその著作を読んだことはなかつた。だから、トークの相手を務められるのか大きな不安があった。しかし、その高いハードルにはぎゅっと目をつぶつて、とにかく死ぬ気で準備すればなんとかなるだろう、と依頼を受けた。まず読んでみた東の「ソルジエニーツィン試論」がとにかくたいへん刺激的だったからだ。なぜ今まで読んでいなかつたのか、過去の自分の無知を恥じた。当日はひどく緊張していたせいか、なにを話したのかはもはや覚えていない。和やかなトークだけは間違いない。

トーク後、食事に行つた席で、わたしは東がチエルノブイリへの取材を企画していて、ロシア語のできるコーディ

ネーターを探していることを知る。もちろん手を挙げた。

三・一のとき、テレビでリアルタイムに見る津波や原発事故の様相には、多くのひとと同じようはどうしようもない無力感を味わった。被災地に行くべきか行くべきではないか悩み、結局なにもできていない状況だった。そんなこともあり、自分が持っているスキルであるロシア語を使って、チエルノブイリの問題に取り組むことには意義を感じた。

こうして、わたしはゲンロンの仕事に関わることになる。そして、その六年後にはゲンロンの代表になつていた。

### 真理や美を追求するかもしだれないが……

さて、じつはこの原稿は思いのほか難航している。「アカデミアの多様なかたち」が与えられたテーマであるが、考えれば考えるほど、ゲンロンはアカデミズムの外にあり、自分もまたそうであることを実感してしまうのだ。小学館の日本国語大辞典をみると、「アカデミズムとは、『大学など、最高度の研究・教育機関を支配する学問至上主義。純粹に真理や美を追求する態度や精神』」とある。また「学術」を引くと、「学問と芸術。学問と芸術。また、学問。特に、学問の研究的側面」だという。確かにゲンロンは知のプラットフォームであろうとしているが、学問至上主義ではない。真理や美は追求するかもしだれないが、純粹かと言われると、それはわからない。ゲンロンはアカデミズムを目指指す。

してはいない。

では、ゲンロンが目指しているのはなにか。それは、東の著書『ゲンロン戦記<sup>(2)</sup>』の副題にもあるように「知の観客」をつくることである。ゲンロンの読者と観客の層は幅広く、たとえばＩＴエンジニアがけつこう多いのだが、他にも介護職や農業、自営業の方もいる。最近では都内のやきとり屋さんがゲンロンの「友の会」という会員サービスの入会者に向けて、自主的に割引を設けてくれたりもした。とにかく知的好奇心の強いひとが多いが、逆に学生や大学教員、出版関係者の割合はさほど高くないようを感じる。トークショーでも論考でも、すでに知識を持つている限られたひとを対象に専門用語を用いて語るのではなく、共通の知的バックグラウンドを持たない多様な観客層に届く言葉を大切にしている。

最初に述べたとおり、ゲンロンカフェのトーケイベントは長い。丁々発止のやり取りを含めて楽しむ時事放談のよくなものだけでなく、学術的なテーマでもやはり長くなりがちだ。コロナ禍で会場に観客を入れることができず、配信のみになつて、トークはますます長くなつた。その理由には、ひとは自分が思つていてよりも喋りたいことがたくさんあることが挙げられるが、もうひとつ、逸脱がたくさんあつたり、雑談が混ざつたりしているほうが、観客が言葉を受容しやすいこともある。

日本でひとが大学に行く理由は、必ずしも勉強するため

ばかりではないだろう。就職のため、大学卒という肩書きを手に入れたい、親に言われた、キャンパスライフ（コロ

ナ禍で消えてしまっていたか）は憧れてさらにはみんなが行くからなんとなく、というひともいるだろう。勉強が大好きで、ひたすら勉強をしていたい、というのはむしろ少數派なのではないか。大学は学問の場としてのみ機能しているわけではない。大学はひとやもの、問題や思想との新たな出会いや経験の場でもあり、また大学時代には自分と向き合う時間を持つこともできる。大学を終えてみてはじめて自分のやりたかったことがわかる、ということだってしばしば起ころ。そもそも受験の際に、自分の適正にそぐわない専門を選んでしまう場合もあるだろう。

本は、ひとが知を求める際に気軽に手に取ることのできる、もつとも便利な形式だ。ありとあらゆるトピックが書籍化されていて、一〇〇〇円程度の新書を一冊読めば、歴史上の出来事や事象、思想上の概念もひととおり知ることができたりもする。もちろん専門書もある。「積ん読」を

して、これから身に着けたい知識をとりあえず物理的に所  
有することも可能だ。書籍は、ひとが知識を蓄え、それを  
楽しむことをサポートする素晴らしいシステムである。

ただ、本は文字の集合体であり、ときに初心者には取り  
付く島もなかつたり、アプローチの可能性がなかなかみつ  
からぬ場合もある。無数に存在する本の中から特定のも  
のを選び、面白さを力説したりして、本とひとを取り結ん  
でくれる存在はありがたい。演劇や映画、ドラマなどでは  
原作があつて、それが現代のわたしたちの身近な問題とし  
て解釈され、提示されるような作品は少なくない。人文書  
だって、人びとの語りのなかで立体化されると、より親し  
みが湧くのだ。

ゲンロンカフェではしばしば書籍を端緒としたイベントを行なっている。テクストに書かれたことが著者の口から語り直されるときには、書き言葉になる過程でそぎ落とされた部分が復活してくることがある。そして、生きた言葉として、書き言葉の面白さを倍加し、本全体の理解を助け

精霊に捕まって倒れる

## 医療者とモン族の患者、 二つの文化の衝突

ファディマン 医療者と移民の患者が背負う異なる文化が衝突した事例を、多文化共生の視点で描く名作。忠平・齋藤訳 ¥4400

## 米兵はなぜ裁かれないのか

信夫隆司 刑事裁判権を軸に、NATO軍、フィリピン、韓国、ドイツなどの事例と比較検討、日米地位協定を再考する。￥4180

## 子宮頸がんワクチン問題

社会·法·科学

ホーランド他 がん予防のワクチンに副作用が続出。世界で論争が続く。開発から商品化の過程を究明。別府宏園監訳 ¥55000

## ジャズ・スタンダード

聴いて弾いて愉しむ 252 曲  
ジョイア 最もよくリサーチされた解説。音楽史家でピアニストによる絶好の手引き。ディスクグラフィ付。鈴木潤訳 ¥9900

## 20世紀知的急進主義の軌跡

## 初期フランクフルト学派の 社会科学者たち

八木紀一郎 世界大の政治の渦の中、マルクス主義の学術拠点として生まれた社会研究所。初期参加者の思想と生涯。￥4950

モミツリヤーノ  
歴史学を歴史学する

ギンズブルグ、ポーコックら後の世代に決定的影響を与えた知識の精髓。史学史9論文、明晰な訳文に周到な註。木庭顯編訳¥7150

精神·自我·社会

ミード 精神も自我も社会的現象である。無数の学生に衝撃を与えたあの社会心理学講義を新たに翻訳で。山本雄二訳 ¥5720

東京文京本郷  
2丁目20-7 みすず書房  
tel.3814-0131 fax 3818-6435(税込)  
[www.msz.co.jp](http://www.msz.co.jp)

てくれる。本では脇道がありすぎると読むことの妨げになることがあるが、語りでは、それらはよりよい理解のために力を發揮する。トークイベントでは、話し言葉の愉しさに導かれ、知の観光を体験できるだろう。

### アカデミズムの外で、知を楽しむ

わたしは博士課程在籍中も、研究者になるのか、それとも通訳などで生きていくのかずっと迷い続けていた。学部時代は外国语学部だったので、そこではできなかつた文学の勉強と、ロシア語力の強化が大学院進学の理由だつた。だから、文学研究とはなにかもよくわかつていなまま大学院に来てしまつた。修士の頃は、指導教員に「批評をやりたいのか、研究をやりたいのか、どちらか選びなさい」と言われたりもした。

そんなわたしが研究に可能性を見出し、続けていけると思えたきっかけがふたつある。ひとつは通訳の仕事を通じて演劇という視点を獲得したこと。もうひとつは演劇博物館での収蔵品整理や展示の経験である。両者と共に通するのは、語りや現場、モノなど、書かれた言葉だけではないリアルななかを通じて、歴史や時間、構造を捉えなおす機会を得たということだった。

演劇博物館には、書籍や写真、パンフレットや台本、それに衣装や小道具や直筆書簡など、演劇や演劇人につわるモノが収蔵されている。それらの収蔵品は特定の人間の

人生と結びつき、舞台の上で上演されても消えていく演劇の公演を記憶する。書籍や写真には思いがけず歴史上の有名人の直筆サインが入つていてることもあれば、伝説的な海外の劇団の公演やきわめてマイナーな小劇場演劇の関連資料が見つかったりもする。文学作品のように完全な形で残つてゐるわけではない過去の演劇の上演を、残されたモノや資料の断片から想起するのは、不思議な、そしてスリリングな作業である。それらのモノは、本とはまた異なる形で、知や感情やできごとの記憶を宿してゐる。

わたしがゲンロンに来たのはたまたまだつた。東の言う「誤配」の結果であるだろう。だが、考えてみれば、ゲンロンとわたしの最初のかかわりである『チエルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』も、記憶と現実を取り結ぶ場所やモノをめぐる取り組みだつた。この本はツアーに発展し、わたしはその後たくさんのみとを連れて、何度もチエルノブイリを訪れることになる。ある場所に赴いて、その場所が持つてゐる記憶に呼びかけ、歴史を想像する——これは二一世紀型の新しい演劇形式である「ツアーア演劇」ととても似ている。それはリアルでフレキシブルな学びのかたちでもあるだろう。

ゲンロンは、アカデミズムを志向していない。もちろん、登壇者やシラスの配信者にアカデミックな知の持ち主はあるが、ゲンロン・シラスというプラットフォームが目指すのは、知を楽しむ場となることである。

そして、観客を育てるとは、知を楽しむ術を心得ている

ひとたちを増やすということだ。彼らは必ずしもあらかじめ知識をたくさん持っていたり、専門的に事実を検証したりする能力を備えていたりする必要はない。そうではなくて、好奇心を持つてさまざまな知に接し、受け取った知を生活に応用したり、自分が生きている時代や社会を考え上で生かしたり、そもそもなぜ自分がいま生きているのかを悩んだりすればいいのだ。別にそれを論文にしたりする必要はない。そういうえば、学術の世界では、考えたり悩んだりすることが好きだからといって、論文が書けるわけではない。けれども人生においては、考え方を論文にしたりするほど重要な場合は少なくない。

アカデミズムの外で、観客として知を享受し、観光客として知を巡る、そんな方にはもつともつと肯定されたい。わたし自身がそういう知の楽しみ方をしている。

註

(1) 東浩紀編『チャエルノブイリ・ダークツーリズムガイド』思想地図B vol.4-1、ゲンロン、二〇一三年。

(2) 東浩紀「ソルジエニーツィン試論——確率の手触り」「郵便的不安たちB」(東浩紀アーカイブス1) 河出文庫、二〇一一年。初出は一九九三年。

(3) 東浩紀『ゲンロン戦記——「知の観客」をつくる』中公新書ラクレ、二〇二〇年。

バイデン政権と中国、そして日本の進路  
佐藤隆三著  
卒寿記念出版

新型コロナ感染の政策課題と分析  
応用経済学からのアプローチ  
焼田 党・細江守紀  
薮田雅弘・長岡貞男〔編著〕  
新型コロナウイルス感染に関する理論と実証による様々な角度からの政策提言と政策分析を読者に問う。◎定価5,390円(税込)

憲法とラディカルな民主主義  
「代表民主制」の限界を問う  
ドミニク・ルソー〔著〕  
山元 一〔監訳〕  
危機に瀕する民主主義を立て直す。フランス憲法学会の泰斗が提唱するラディカルな民主主義論。◎定価4,400円(税込)

6つの物語でたどる  
ビッグバンから  
地球外生命まで  
現代天文学の到達点を語る  
マシュー・マルカン+  
ベンジャミン・ザッカーマン〔編〕  
岡村定矩〔訳〕  
宇宙の起源と進化の最新の話題を、最もふさわしい著者6人が、いきいきと語る。豊富な訳注で、その魅力を余すところなく伝える。 ◎定価2,750円(税込)

日本評論社  
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4  
☎03-3987-8621 <https://www.nippyo.co.jp/>

## 大学出版部協会・活動報告

六月二十五日（金）

※連続オンライン講演会「学術出版を語る」<sup>1</sup>

『コロナ禍でも立ち止まらないために―学術出版の次を妄想する』（共催・日本出版学会）

講師・江草貞治（有斐閣代表取締役）

七月一六日（金）第二回 営業部会

七月三〇日（金）第三回 理事会

八月五日（木）第二回 編集部会

八月二七日（金）

営業部会オンラインセミナー

『中小出版社の共同販促・物流の取り組み』

講師・工藤秀之（トランスピュー代表）

第三回 営業部会

九月三日（金）

※連続オンライン講演会「学術出版を語る」<sup>2</sup>

『学術出版の縁か―変化の時代を生き抜くために』（共催・日本出版学会）

講師・喜入冬子（筑摩書房代表取締役）

九月一七日（金）第四回 営業部会

九月二十四日（金）第四回 理事会

一〇月七日（木）第三回 編集部会

表示価格は税込です。

## 北海道大学出版会

▼石原真衣編著『アイヌからみた北海道一五〇年』（四六判・一三六頁・一七六〇円）「北海道命名150年」をアイヌの人たちはどう見つめていたのか。多様に紡ぐ、過去と現在、未来への思い。

▼山村高淑／フイリップ・シートン編著・監訳『コンテンツツーリズム－メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』（A5判・四一〇頁・四一八〇円）国内外の事例からコンテンツツーリズムの概念を再検討。越境的な側面とメディア横断的な側面を提示する。

▼今村信隆著『一七世紀フランスの絵画理論と絵画談義―語らいと沈黙の美術批評史』（A5判・三一八頁・六八二〇円）一七世紀後半のフランスの絵画論や会議録、小説等を読解し、美術理論や美学の成立過程で零れ落ちてしまった、語らいの価値を再考する。

▼野間秀樹著『言語 この希望に満ちたもの－TAVnet時代を生きる』（四六判・三五二頁・二九七〇円）大量高速のことばが飛び交う言語危機のTAVnet（タブネット）時代に、言語のありようを見据える（構え）を提示する。

## 弘前大学出版会

▼弘前大学教育学部編『弘大ブックレット14人、人と育つ—弘前大学教育学部特別活動授業録』(A5判・六五頁・五五〇円)教師の「生きた経験」に基づく視点から、集団で生きる意味を照らす。痛烈な失敗例なども交えながら、「生きることに深く触れるユニークな視点と、考えの掘り進め方をまっすぐに示す。自分を見つめる手助けになる書。

▼弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究所編『白神学入門』(2021)(A4判・一〇四頁・一九八〇円)多様な切り口から白神山地の人や動植物のくらし、自然環境を紹介。学問分野としては気象学、地質学、古生物学、植物学、動物学、考古学、民俗学、地理学など多岐にわたる。白神山地について幅広い知識を得たいという方におすすめ。

▼長瀬智行・吉岡良雄・別宮耕一著『暗号技術を支える数学(第2版)』(B5判・二六一頁・二七五〇円)昨年刊行し大好評を博した書籍の改訂版。キャッシュレス時代に不可欠な情報保護や暗号の仕組みを分かりやすく解説。付録にはC言語プログラムをできるだけ多く掲載。

## 東北大学出版会

▼東北大学教養教育院編『東北大学教養教育院叢書 大学と教養 第3巻 人文學の要諦』(A5判・二四八頁・二七五〇円)人文學は、西洋に発する大学教育の基礎に位置づけられてきた。大学において何よりもまず「人間」が問われ、多方面から多様に探究されるが、人間の学である人文學がその根幹に置かれるべきと考えられたのである。哲学・数学・心理学など各分野の先達がそれぞれの関心から「人間の学」を考える論考集。

▼栗山進一著『分子疫学入門—精密医療の基礎知識』(A5判・二三四頁・三三〇円)次世代医療の方向性のひとつは精密医療である。精密医療は個別化医療ともよばれ、遺伝・環境相互作用の解明に伴いこれまで対処困難だった病気の予防や治療を目指している。この精密医療に理論的根拠を与えるのが分子疫学だ。ゲノムコホートやバイオバンクなどに関する分子疫学的素養がなければ、次世代医療の研究および実践は叶わない。本書は分子疫学の入門書であり、なおかつ医学情報・ゲノム情報や人工知能解析技術などの活用に必携となる書である。



▼小谷究・三倉茜著『女性コーチ—それぞの歩み』(A5判・一九二頁・一七六〇円)女性コーチの実際について理解を深め、今後コーチになりたい女性アスリートが増えることに期待を込めた一冊。



▼杉山雅洋著『交通学の足跡—角本良平の交通学探索の旅路を辿る』(A5判・二九八頁・三六三〇円)角本良平は超人的な研究活動を行い膨大で貴重な研究実績を残した。都市交通研究・通勤新幹線構想、道路公団改革、郵政改革等多岐にわたる主張を整理・紹介し、その偉大な足跡を紐解く。

## 流通経済大学出版会

## 聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『教職実践演習—幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』(B5判・一四〇頁・一七六〇円) 幼児教育に携わるため学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。

▼宇佐美博子・河村久・神田由紀・黒須利夫・小林芳枝・長橋雅俊・松井孝夫・八木正一著『教職実践演習』(B5判・一四六頁・一七六〇円) 中学校・高等学校教諭を目指す方に向け、教職課程の振り返りから生徒指導要録・通知表の記入の仕方まで解説。教職の魅力が満載。

▼高橋裕樹著『新しい時代のキャリアデザイン』(A4判・一六七頁・一七六〇円) 全十五回構成で、記入式ワークシートを使いながら、キャリアデザインの基礎から応用まで段階的に理解を深める。「なぜ働くのか」を問い合わせつつ、一人ひとりが激動の時代を乗り切り、力強く生きるための人生の羅針盤となる書。

## 慶應義塾大学出版会

▼矢嶋康次著『記憶の居場所（ときのすみか）』(四六判・二四〇頁・一九八〇円) TVの経済ニュース解説に常連コメントターとして人気のエコノミストにも、日々あれこれ悩むことは多い。一見すぐそうな識者が日常の意外なところで七転八倒するさまを軽快に綴った痛快経済工ッセイ。

▼ティモシー・スナイダー著／松井貴子訳／梶さやか解説『秘密の戦争—共産主義と東欧の20世紀』(四六判・五二〇頁・四九五〇円) スターリンとヒトラーが台頭する戦間期の東欧で共産主義と民族主義に抗い、秘かな戦いをくり広げた一人の男の数奇な生涯を通して二〇世紀東欧史の最深部を描き出すティモシー・スナイダーの出世作。

▼飯塚倫子編著『～善い～ビジネスが成長を生む～破壊と包摂のイノベーション』(四六判・四〇〇頁・二二〇〇円) 科学技術を活用してイノベーション・エコシステムを形成し、貧困をはじめ社会課題を解決する起業家・投資家らを紹介。

## 専修大学出版局

▼白井功著『ビジネスエコノミクス』(A5判・三二二頁・三七四〇円) ミクロ経済学は、様々な応用経済学に理論的基礎を提供してきた。しかし、そのことは抽象化・標準化を伴うがゆえに現実経済との関連が見えなくなっている。そこで、本書では両者の関連を、ビジネスあるいは企業の経営管理の側面から捉えなおす試みを行う。

▼根間弘海著『大相撲の神々と昭和前半の三役行司』(A5判・二一八頁・三〇八〇円) 大相撲千秋楽の最後に行われる行司の胴上げ。この儀式の中斷と復活を考察した「手打ち式と神送りの儀式」など、大相撲をめぐる六つの論考を収録。

▼専修大学キャリアデザインセンター編『キャリアデザインテキスト第4版—なりたい自分になるために』(B5判・一六四頁・一四三〇円) 働く社会の環境、自己アイデンティティの確立や開発すべき能力について学び、キャリアデザイン力を身につけるためのワークブック。大学生が、自身の課題を見つけ、学生生活で何をすべきかを考え行動することを目指す。改訂第4版。

## 玉川大学出版部



▼田村秀著『公立大学の過去・現在そして未来—持続可能な将来への展望』(A5判・一九二頁・三五二〇円) 公立大学は、国立大学と私立大学のはざまにたち、その存在価値が問われた過去もあるが、一九九〇年以降、国の方針が変わり、地方都市での設置ラッシュが続いた。人口が減少する将来、公立大学はどこへ向かおうとするのかを明らかにする。

▼小原芳明監修『全人教育の歴史と展望』(A5判・三六八頁・二四二〇円) 小原國芳の唱えた教育論と「全人教育」とは何だったのか、また現代の教育にどのように息づいているのか。小原國芳の生涯、著書、玉川学園の歴史など多様な視点からその理論を読み解き、現代の教育実践まで解説する。巻末には國芳の言葉を集めた資料編を収録。

司・渡邊裕美子訳『ユーラシアの女性神話—ユーラシア神話試論II』(A5判・二七八頁・二四二〇円)『アーサー王神話大事典』や『中世の祝祭』などの著書で知られる著者が、主として中世期の文献に登場する「女神」や女神的存在を、ユーラシア神話の観点から分析した一二編の論考をまとめた独創的な論文集。

▼関口定一著『ホワイトカラー雇用史序説—20世紀アメリカの企業社会』(A5判・五六六頁・六六〇〇円) 大きく変貌する日本の雇用と労使関係を見据えながら、アメリカの巨大企業ゼネラル・エレクトリック社の膨大な史料に分け入って、20世紀ホワイトカラーとブルーカラーの世界を描いたこの分野の基本書。

▼中央大学文学部編『読書する知性—本づくり』『演習成果』(四六判・二四〇頁・一一〇〇円) 文学、歴史、社会学、哲学等々。学間に憑かれた者たちの過去の読書体験の赤裸々な告白。二十歳の頃に知の達人たちは、どんな本を読んだのか?! その本に影響されて、その後どんな人生を歩んだのか? 空前絶後の授業の記録。

## 中央大学出版部

## 東京大学出版会

▼川添愛著『言語学バーり・トウードーRound 1 A-1は「絶対に押すなよ」を理解できるか』(四六判・二二四頁・一八七〇円) 日常にある言語学の話題を、ユーモアあふれる巧みな文章で綴る。著者の新たな境地、抱腹絶倒必至! 「読むなよ、絶対に読むなよ!」。

▼倉田徹著『香港政治危機—圧力と抵抗の2010年代』(四六判・四六四頁・三五二〇円) 自由都市・香港はなぜこのような事態に陥ったのか。香港政治研究の第一人者である著者が、危機の深層に迫る。香港情勢分析の最新成果。

▼水町勇一郎著『詳解 労働法版』(A5判・一五一〇頁・八五八〇円) 働き方のルールを定めた労働法制のすべてがわかる概説書。育児介護休業法の改正など法令改正のほか、「同」労働同一賃金」最高裁判決など重要判例を詳しく紹介、最新の動向を踏まえた改訂版。

▼千葉滋著『14歳からのプログラミング』(A5判・二四八頁・二四二〇円) 中学校で学ぶ知識があれば大丈夫! 子どもも大人も楽しめる入門書。Scratchから本格言語への架け橋としても最適。

小原芳明  
監修  
100 Years of  
Zenjin Education:  
Footsteps into the Future

文学、歴史、社会学、哲学等々。学間に憑かれた者たちの過去の読書体験の赤裸々な告白。二十歳の頃に知の達人たちは、どんな本を読んだのか?! その本に影響されて、その後どんな人生を歩んだのか? 空前絶後の授業の記録。

29 大学出版部ニュース

# 東京電機大学出版局

▼足立修一著『制御工学のこころ—古典制御編』(A5判・一二三二頁・三三〇〇円)制御工学を初めて学ぶ方に「こころ(核心)」を伝授。電気電子や機械分野に限らず、AIやIOTをはじめとする情報系分野においても必要な制御工学の知識について、効率よく学べるようまとめた。ポイントだけでもしっかりと押さえた読者に向けた一冊。初めて「制御工学」を学ぶ学生、「制御」の知識が必要な技術者、改めて学び直してみたい方、制御が専門ではないのに、授業を担当している先生方に特におすすめする一冊。

▼面谷信著『大学院活用術—理工系修士で飛躍するための60のアドバイス』(A5判・一五四頁・二二〇〇円)理工系の大学生に向けた、大学院への進学を誘う啓蒙書。進学する意義やメリット、進学によって何を身につけるか、どうすれば有意義に過ごせるか、などについて具体的にアドバイス。また、研究の進め方や進路に戸惑っている修士在学生に対して、進学した意義を再認識してもらい、飛躍のきっかけとなるアドバイスを豊富に掲載。

# 法政大学出版局

▼白永瑞編 青柳純一監訳『百年の変革—三・一運動からキヤンドル革命まで』(四六判・三七八頁・四四〇〇円)日本からの独立運動に始まる激動の変革史。分断、民主化闘争など政治と歴史から文化、ジェンダー問題まで多角的に論じる。

▼E・フェルスター著 三重野清顕・佐々木雄大・池松辰男・岡崎秀一郎・岩田健佑訳『哲学の25年—体系的な再構成』(四六判・六五四頁・六一六〇円)ドイツ観念論と呼ばれる思考が発見し遂行した哲学的理念の展開を徹底して内在的に跡づけたスリリングな書。

▼A・アルノー／P・ニコル著 山田弘明・小沢明也訳『ボール・ロワイアル論理学』(A5判・五〇〇頁・五五〇〇円)

リセや大学で使用され、フランス人の思考方法の規範となつた古典を、一六八三年の第五版からついに全訳。

▼小田友弥著『ワーブラスと湖水地方案内の伝統』(A5判・七〇四頁・八八〇円)ワーブラスといギリス・ロマン派文学の研究はもとより、旅行文学、觀光の歴史、美術史、環境問題の研究にも寄与する画期的な労作。

# 武蔵野大学出版会

▼阿部和穂著『薬名「語源」事典』(B5判・七六〇頁・七四八〇円)その薬はなぜその名前がついたのか?「語源」「歴史」「エピソード」から薬名の由来を解説。日本の医薬品1321点を網羅した、薬剤師国家試験対策にも最適な一冊。



▼佐藤佳弘・スマイリー・キクチ共著『ネット中傷駆け込み寺』(A5判・二四八頁・一九八〇円)『脱!スマホのトラブル』『脱!SNSのトラブル』『インター・ネットと人権侵害』などの著者である佐藤佳弘先生(武蔵野大学名誉教授)と、タレントのスマイリー・キクチ氏が、ネットの中傷の現状とトラブルに巻きこまれた際の対応策を、親しみやすいイラストと共に解説する。

◎YouTubeで解説動画配信中!

【検索ワード】武蔵野大学出版会KAW  
ARABA

## 武蔵野美術大学出版局

## 明星大学出版部

## 早稲田大学出版部

▼高島直之著『イメージかモノか一日本現代美術のアボリア』(A5判・二五六頁・二七五〇円)戦後日本で、観念と物質の乖離と向き合うことになつたのは、一九五〇年代半ばからである。それは六〇年代に「反芸術」というキーワードによって拡大し、七〇年前後の「もの派」などをアクセントとして七〇年代後半まで、その波が及んでいった。同時に、写真・映画が「見える精神」として本来の機能を蘇らせた。ハイレッド・センターによる山手線事件、赤瀬川原平の千円札裁判。日本現代美術の事象を読み解く。

▼加藤幸治著『民俗学 ヴアナキユラ』編「人と出会い、問い合わせる」(A5判・二五六頁・一七六〇円)ヴァナキユラとは、「人々の生活から育まれた」固有な文化である。私たちは幾つものコミュニケーションを生き、同時にネットの世界にも人の営みがある。あらゆるレベルでヴァナキユラは生まれ、そこに素朴な問い合わせが潜む。みずから問い合わせを見出し、それと付き合い続けるのがフィールドワークであり、民俗学を学ぶ意義となる。大人気のオンライン授業、ついに書籍化。

▼須藤康介著『教育問題の「常識」を問いかねばならないこと』(早稲田新書1)本書は、様々な理論やデータを紹介し、世間一般で語られている教育問題のどのが本当で、どれが誤解なのかを検討していく。そして、本當だとしたらその解決方法、誤解だとしたら誤解が生じている理由を考える。

▼神林寿幸・樋口修賀・青木純一著『背景と実態から読み解く教育行財政』(A5・三四〇頁・一九七〇円)本書は豊富な資料、データをもとに背景と実態に着目しながら日本の教育行財政制度を詳細に解説する。初学者に加えて、教育行財政を専攻し、学位論文執筆にむけて研究テーマを探している、あるいは関連事項の理解を深めたいという学生、大学院生や教育行政制度について学びたいという教育関係者におすすめしたい。



(各巻 新書判・税込価格九九〇円)



教育問題の「常識」を問いかねばならないこと  
—不登校から家庭・学歴まで—  
第2版

▼田村修一著『凛烈烈日本サッカーの30年』(早稲田新書4)  
▼山岸剛著『東京パンデミック』(早稲田新書5)  
▼假屋崎省吾著『絶対美感』(早稲田新書6)  
▼手塚孝典著『幻の村』(早稲田新書7)

『幻の村』(早稲田新書7)  
『假屋崎省吾著  
『絶対美感』(早稲田新書6)  
『手塚孝典著  
『幻の村』(早稲田新書7)』

▼加藤諦二著『生きることに疲れたあなたが一番にしなければならないこと』(早稲田新書1)  
▼森永邦彦著『AとZ アンリニアレイジのファッショニ』(早稲田新書2)  
▼小山鉄郎著『濱田政則ほか著『国境なき技術団スマトラ島から東北へ』(早稲田新書4)  
▼山岸剛著『東京パンデミック』(早稲田新書5)  
▼田村修一著『凛烈烈日本サッカーの30年』(早稲田新書4)  
▼手塚孝典著『幻の村』(早稲田新書7)  
▼假屋崎省吾著  
『絶対美感』(早稲田新書6)  
▼手塚孝典著  
『幻の村』(早稲田新書7)』

## 関東学院大学出版会



序 章 パニック—長崎水害の教訓  
第 1 章 治水のフォーカロア  
第 2 章 水防の騒乱  
第 3 章 利根川治水の展開  
第 4 章 治水と水防の変遷と構図  
終 章 近代治水の課題

▼宮村忠著『改訂 水害—治水と水防の知恵』(B6判・一二三二頁・一〇九〇円) 多数の河川が国土を刻む日本においては、治水が永遠のテーマである。本書は、公共事業に頼るあまり被害を大きくする現代水害の実態を紹介しながら、各地に伝わる自主防災の知恵の再考を提倡する。地球温暖化に伴う気象変動により、今まで水害が起きなかつた地域で甚大な被害を受けるようになった近年においても、重要な知見を得ることができる一冊。

昭和六三年土木学会受賞作品改訂版。

▼佐藤彰一著『フランク史 I クローヴイス以前』(A5判・四〇〇頁・七九二〇円) 欧州はギリシア・ローマからまつすぐに生まれたのではない。世界システムの大変動後、遠隔地交易、ローマ帝国との対抗、民族移動などを経て誕生した、五百年にわたるフランク国家。本巻ではその淵源から初代王に至るまでを描く。

▼ダストン・ギャリソン著／瀬戸口明久他訳『客觀性』(A5判・四四八頁・六九三〇円) 客觀性とは何か。科学はいかにして「客觀的なもの」と向き合うようになったのか——。近世の博物学や解剖学から、写真の衝撃を経て、現代のナノテクノロジーまで、科学者の実践や「認識的徳」の展開をたどり、客觀性の歴史を壮大なスケールで描き出した名著。

▼毛里和子著『現代中国 内政と外交』(A5判・二四〇頁・三九六〇円) 世界政治の焦点——。強勢外交と権威主義政治は切り離せない。グローバル化した中国の内政と外交を同時にとらえ、國家資本主義から「周縁」問題まで、両者のネクサスに照準を合わせつつ、革命後の七〇年をふまえて現在の姿を浮彫りに。

## 名古屋大学出版会



▼沼野充義・藤井省三編『囚われて 世界文学の小宇宙2』(四六判・三四〇頁・二四二〇円) ロシア未来派の雄フレーブニコフ「虜囚」「李昂」「モダンダンス」等、初訳・新訳の傑作短編一二作品。

▼亀山郁夫・望月哲男・番場俊・甲斐清高編『ドストエフスキイ 象徴とカタストロフィ』(A5判・三〇六頁・三三〇円) 生誕二〇〇年、ついに再創造される文学・美術・映画・オペラ。内外の傑出した研究者による国際シンポジウムの成果と、書下ろし評論を加えた。

▼佐藤都喜子著『現代ヨルダン・レボート アラブの女性たちが語る慣習・貧困・難民』(A5判・一九〇頁・一二〇〇円) 一一年間JICA支援活動のプロジェクト・リーダーを務めた著者が現地の女性の本音を聞き取ったルポ。難民問題、パンデミック等に立ち向かう姿。

## 名古屋外国語大学出版会

## 京都大学学術出版会

## 大阪大学出版会

## 関西大学出版部

▼谷川建司著『ベースボールと日本占領』  
(四六判・三〇四頁・二二〇円) 占領期のアメリカ軍人たちは、戦前の日本人が実は日本野球でB・ルースやL・ゲーリックに熱狂した野球爱好者であったことを知る。武道を禁止する一方で野球を普及するスポーツ統制によって、かつては「理解不能」であった日本人の「心を揺る」戦いを進めた文化外交政策の実相に迫る。※『学術選書』通巻一〇〇冊

▼梁海燕ほか訳『費孝通学術論集—述懐と再考』(A5判・四六五頁・五二八〇円) 社会人類学の父マリノフスキイの薰陶を受け、欧米から学んだ手法を中国の地域的多様性に応用し独自の方法論をみだした費孝通が、次世代をなう若者たちに語った学術論文集。清水展氏推薦。

▼床呂郁哉編『わざの人類学』(菊判・三六〇頁・三九〇円) 技術とはテクノロジーだけを意味しない。歩く、座るなどの身体技法から原子力まで、靈長類学・人類学・生理学・哲学等の気鋭の論客が、ハイデッガーやモースの技術論を越えた「わざ」の視角から、現代社会の本質に迫る。

▼藤井真一著『生成される平和の民族誌—ソロモン諸島における「民族紛争」と日常性』(A5判・三二四頁・六一六〇円) 紛争の渦中のガダルカナル島で、暴力や敵対意識が表面化せず日常生活の中に平和が生成された背景とは。

▼ベレジコワ・タチアナ著『海を渡つた人形使節—国際人形交流から見た近代史』(四六判・三二八頁・四五〇円) 近代日本における国際人形交流史を明らかにする。少年赤十字の人形交流への貢献、ヨーロッパでの人形贈呈の歴史についても考察。

▼真嶋潤子編著『技能実習生と日本語教育』(A5判・四三二頁・六六〇円) 制度と実情の実態解説と、外国人労働者に必要な日本語教育のあり方を考える。

▼宇野田尚哉・坪井秀人編著『対抗文化史—冷戦期日本の表現と運動』(A5判・三七〇頁・六〇五〇円) 対米従属を前提としない「対抗文化」を目指す表現者たちは、作品を生み出すなかでいかに表現を展開してきたのか。

▼亀井克之著『日英仏 日本拳法の基本習得教書—日本拳法に学ぶリスクマネジメント』(B5判・一五二頁・二六四〇円) 一九三三年、関西大学で澤山宗海が創始した防具着装で実戦する日本拳法。また、一九七八年、関西大学で亀井利明が日本リスクマネジメント学会を創設し、リスクマネジメント研究。関西大学を発祥とする二つの「粹」な共演の書。



▼後藤元伸著『権利能力なき社団と民法上の組合—法人でない団体に関する日本ドイツ比較法研究』(A5判・二二〇〇円) 法律の私法・民法領域における法人でない団体につき論じる研究書。法人でない団体の法的基礎には、いわゆる権利能力なき社団と民法上の組合があり、日本とドイツの比較法研究に基づき新たな法解釈論を提唱する。それは日本の二〇一七年民法改正と、ドイツの新たな権利能力なき社団論を踏まえている。

## 関西学院大学出版会



▼ 安岡匡也著『少子高齢社会における経済分析』（A5判・一五〇頁・三五二〇円）出生率内生化モデルに基づいた理論分析。



▼ 松本有一著『ピエロ・スラッファ—非主流の経済学者』（A5判・三〇四頁・三九六〇円）一〇年に亘るスラッファ研究を一冊に纏める。



▼ 田中耕一著『社会学的思考の歴史—社会学は何をどう見てきたのか』（A5判・一七六頁・二〇九〇円）一七世紀ホップズから二〇世紀フーコーまで。

## 九州大学出版会

### 編集後記

▼ リチャード・オヴァアリー著／加藤洋介訳『夕闇の時代—大戦間期のイギリスの逆説』（A5判・四六〇頁・七九二〇円）

大戦間期のイギリス人はファシズムと共産主義をどうとらえたか？ 戰史研究の第一人者が膨大なアーカイブ資料から読み解く戦間期のイギリス文化史。

▼ 大谷順子編『四川大地震から学ぶ—復興のなかのコミュニティと「中國式レジリエンス」の構築』（A5判・三一四頁・四一八〇円）四川大地震発生から13年経過した今、復興政策、被災者のこころのケア、被災地観光、少数民族、防災教育といった多様な視点から変容する中国社会を中長期的視点で見つめ、わが国が汲むべき教訓を考える。

▼ 高橋勤著『野生の文法（グラマー）—ソロー、ミューア、スナイダー』（A5判・二三二頁・四六二〇円）従来、自然詩人、シンプルライフの実践家とみなされたソローを「野生」という鍵概念に注目して読み直し、さらに環境活動家ジョン・ミューア、現代詩人ゲーリー・スナイダーに与えた影響を考察する。

▼ 「大学を大学の外に出す」とは、越智博美氏の論考で紹介される哲学者大河内泰樹氏の言葉である。ここで大学から取り出そうとしている「大学」とは何か。四名による論考は、大学の現在地を考えるうえでも、新鮮な視点を与えてくれる。紙幅の制約により、本誌での紹介事例は限られるものの、「多様なかたち」には星の数ほどの試みがある。知ること学ぶことを諦められない人たちの挑戦は続く。

---

ダイニック(株)	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル TEL 03-5402-1811 <a href="https://www.dynic.co.jp">https://www.dynic.co.jp</a>
(株)太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821 <a href="http://www.p-taihei.co.jp">http://www.p-taihei.co.jp</a>
(株)太平洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111 <a href="https://www.p-taiyosha.co.jp">https://www.p-taiyosha.co.jp</a>
(株)竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617 <a href="https://www.takeo.co.jp">https://www.takeo.co.jp</a>
(株)東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区猿楽町1-2-1 TEL 03-3291-1771
(株)とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200 <a href="https://www.toko-ai.com">https://www.toko-ai.com</a>
東光整版印刷(株)	〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15 TEL 03-3632-0801
(株)トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288 <a href="https://www.talligent.jp">https://www.talligent.jp</a>
図書印刷(株)	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700 <a href="https://www.toshio.co.jp">https://www.toshio.co.jp</a>
(株)日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431 <a href="http://www.nissinkoukokusya.com">http://www.nissinkoukokusya.com</a>
(株)日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-6256-7528 <a href="https://www.nikkei.co.jp">https://www.nikkei.co.jp</a>
日本宣伝販売(株)	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021 <a href="http://www.nihon-senden.jp">http://www.nihon-senden.jp</a>
(株)博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711 <a href="https://www.hakuhodo.co.jp">https://www.hakuhodo.co.jp</a>
藤原印刷(株)	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191 <a href="https://www.fujiwara-i.com">https://www.fujiwara-i.com</a>
(株)平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301 <a href="http://www.heibun.co.jp">http://www.heibun.co.jp</a>
(株)毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340 <a href="https://www.mainichi.co.jp">https://www.mainichi.co.jp</a>
誠製本(株)	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952 <a href="http://www.makoto-seihon.com">http://www.makoto-seihon.com</a>
名鉄局印刷(株)	〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-13-23 TEL 052-561-3272 <a href="http://www.meitetukyoku.co.jp">http://www.meitetukyoku.co.jp</a>
(株)遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325 <a href="http://www.yubun.co.jp">http://www.yubun.co.jp</a>
(株)読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111 <a href="https://www.yomiuri.co.jp">https://www.yomiuri.co.jp</a>

---

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨に賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

# 一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

---

(株)朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749 <a href="https://www.asahi.com">https://www.asahi.com</a>
亞細亞印刷(株)	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858 <a href="http://www.asia-p.co.jp">http://www.asia-p.co.jp</a>
(株)アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360 <a href="https://www.abel-sha.com">https://www.abel-sha.com</a>
尼崎印刷(株)	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122 <a href="http://www.amain.co.jp">http://www.amain.co.jp</a>
(株)A L E	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627 <a href="http://www.adv-logi-eng.co.jp">http://www.adv-logi-eng.co.jp</a>
王子製紙(株)	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072 <a href="https://www.ojipaper.co.jp">https://www.ojipaper.co.jp</a>
(株)加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281 <a href="http://www.bunmeisha.co.jp">http://www.bunmeisha.co.jp</a>
城島印刷(株)	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102 <a href="https://www.kijima-p.co.jp">https://www.kijima-p.co.jp</a>
(株)条川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811 <a href="http://www.kumekawa.jp">http://www.kumekawa.jp</a>
クリムゾン・インク・テクノロジーズ(ジャパン)	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001 <a href="https://www.crimsonjapan.co.jp">https://www.crimsonjapan.co.jp</a>
港北出版印刷(株)	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201 <a href="http://www.kohoku.co.jp">http://www.kohoku.co.jp</a>
三松堂(株)	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360 <a href="https://www.sanshodo.co.jp">https://www.sanshodo.co.jp</a>
三美印刷(株)	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131 <a href="https://www.sanbi.co.jp">https://www.sanbi.co.jp</a>
三立工芸(株)	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171 <a href="https://www.sanritsu-net.co.jp">https://www.sanritsu-net.co.jp</a>
三和印刷(株)	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300 <a href="http://www.sanwaprinting.jp">http://www.sanwaprinting.jp</a>
信濃印刷(株)	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601 <a href="http://www.shinano-insatsu.co.jp">http://www.shinano-insatsu.co.jp</a>
(株)渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185 <a href="http://www.bunsenkaku.co.jp">http://www.bunsenkaku.co.jp</a>
(株)眞興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181 <a href="https://www.shinkousha.co.jp">https://www.shinkousha.co.jp</a>
新日本印刷(株)	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611 <a href="https://www.sinnihon.net">https://www.sinnihon.net</a>
(株)精興社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021 <a href="https://www.seikosha-p.co.jp">https://www.seikosha-p.co.jp</a>
創栄図書印刷(株)	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288 <a href="https://www.soei-pb.co.jp">https://www.soei-pb.co.jp</a>
大同印刷(株)	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550 <a href="https://www.daidou-jp.com">https://www.daidou-jp.com</a>

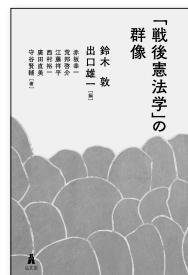
---

●「憲法学者」とは何だったか、これから何であり得るか

## 「戦後憲法学」の群像

鈴木 敦・出口雄一 編／赤坂幸一・荒邦啓介・江藤祥平・西村裕一・廣田直美・守谷賢輔 著  
四六判 368頁 定価 3,960円（税込）

その複雑さと多様さにもかかわらず「護憲」や「抵抗」と結び付けられるがちな「戦後憲法学」。その誕生過程の検証から、「保守」憲法学の流れ、「東大学派」や「京大学派」の系譜、9条論争における様々な主張など、歴史的かつ多面的に考察する。



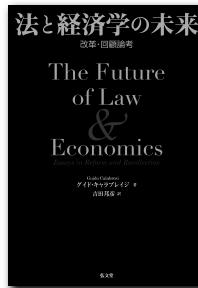
●キャラブレイジ理論のエッセンスを集約！

## 法と経済学の未来

——改革・回顧論考

ガイド・キャラブレイジ 著／吉田邦彦 訳  
A5判 208頁 定価 3,850円（税込）

経済学が視野に入れてこなかった、「メリット財」をはじめ利他主義、慈善、非営利団体、そして、好み、価値といったテーマについて、構想力とオリジナリティ溢れる議論を展開。「法と経済学」の祖、巨人キャラブレイジを知るための必読書。



●消費者トラブルの解決に必携の注釈書、最新版！

## 条解 消費者三法 [第2版]

消費者契約法・特定商取引法・割賦販売法

後藤巻則・斎藤雅弘・池本誠司 著  
A5判 2068頁 定価 23,100円（税込）

消費者契約法、特定商取引に関する法律、割賦販売法の逐条解説書。業法の伝統に根ざす専門的な用語を丁寧に説明し、その条文に関わる政省令の内容にも言及。2021年4月施行の割販法改正、同年6月成立の特商法改正も盛り込んだ最新版。



# 一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

## ○北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目  
北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## ○弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町 1 番地  
弘前大学附属図書館内  
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

## ○東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1  
東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## ○流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畠 120  
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

## ○聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬 550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## ○慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田 2-19-30  
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

## ○専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町 3-10-3  
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

## ○玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## ○中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野 742-1  
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

## ○東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場 4-5-29  
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

## ○東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町 5 番  
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

## ○法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北 3-2-3  
法政大学九段校舎内  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## ○武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町 1-1-20  
武蔵野大学構内  
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

## ○武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7  
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

## ○明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保 2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-591-9254

## ○早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田 1-9-12  
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

## ○関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1  
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

## ○名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1  
名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## ○名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山 57  
名古屋外国語大学内  
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

## ○京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69  
京都大学吉田南構内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## ○大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘 2-7  
大阪大学ウエストフロント  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

## ○関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35  
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

## ○関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155  
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

## ○九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜 3-8-34  
九州大学産学官連携イノベーションプラザ 305  
TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160

## ○大阪経済法科大学出版部(休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺 6-10  
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

### [発行所]

一般社団法人 大学出版部協会

ISSN 0913-3305

振替 00170-8-389131

### 〒102-0073

東京都千代田区九段北 1 丁目 14 番 13 号

メゾン萬六 403 号室

TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092

E-mail : mail@ajup-net.com

URL : <https://www.ajup-net.com/>

### [表紙写真]

ゲンロン提供



\*本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式 HP でも、PDF 版を全文無料でダウンロードできます

大学出版128号（2021年秋）

2021年12月1日発行

頒価 100円（円共）

[表紙デザイン] 奥定泰之